

第5章 医療

幸運

「飛べ、ドクターヘリ!」白い旗が大きく振られると、ヘリコプターの爆音がいっそう大きくなった。ヘリコプターは酒匂川の河川敷から、フワッと浮き上がると、いったん南の空に飛び立ち、東に方向を変えて飛び去った。飛んでいくドクターヘリに向かって、「その命助けて」と願った。ドクターヘリは神奈川県足柄上郡松田町の足柄上病院から東海大学病院へ患者を運びます。私は松田郵便局へ行った帰りに、もう十回以上もドクターヘリと遭遇しています。優れた医者、設備の整った病院、その治療を受けられた人は「幸運だった」というのはおかしい。医療はどの人にも平等にあるべきものです。

(註) ドクターヘリ。救急医と看護師が乗り、患者に初期治療を施しながら医療機関まで運ぶヘリコプター。人口呼吸器やAED(自動体外式除細動器)などを積み、半径五十キロ圏内なら通常十五分以内で到着できるため、救急車などに比べ救命率が高い。平成十九年(2007年)六月、全国に配備を促す特別措置法が成立した。使用料金は不明。

救急車

それは、平成十七年(2005年)一月三十一日の寒い朝の事でした。階下から「オー、オー」とも「アー、アー」とも取れる呻き声に近い声が響きました。うとうとしていたので、すぐ気付きました。時計を見ると四時四十五分です。「おじいちゃんがおかしいよ」と言って、おじいちゃんの部屋に行ってみると、おじいちゃんが、あお向けに倒れて何か言おうとしています。でも言葉が出ません。左手を振り回して何か言いたそうですが、わかりません。「おじいちゃんが大変。来て!」夫を呼びました。そして、

すぐ救急車。慌ていたので一一〇番に電話をしてしまいました。電話機の側に、「インターネットのウソの取り立て人が来たら一一〇番をする事」と書いてあったからです。夫は、インターネット上で身に覚えのない支払いを請求されていて警察に届け出ていました。

「救急車をお願いします!」「わかりました。住所と名前、様態をどうぞ」「九十歳です。倒れて動けませんが、意識はあります。早く来てください」。救急車がなかなか来ないので、もう一度電話をしました。「まだですか。急いでください」待っても、まだ来ないので、また電話をしました。どうしたのでしょうか。「ウチの場所が、わかりますか?」「今、そちらに向かっています」。松田町の方から救急車のピーポーピーポーという音が聞こえて来ました。外に出て道の中央に立って、両手をふり、「こっちです。ウチです。お願いします!」と叫びました。

連絡をしてから二十分もかかって救急車が来ました。家から松田消防署までは自家用車で五分です。夫が、おじいちゃんを毛布に包んで抱きかかえて、体をさすったりしています。おじいちゃんは、何か言おうとして左手を振り回していますが言葉が出ません。

レスキュー隊の人は三人です。靴にビニールカバーをして家に上がりました。ビニールカバーを靴に取り付けるのに時間がかかっているのに、「そのままどうぞ」と言いました。脈を診てから点滴をしました。「私が乗って付き添って行きますから」「はい、わかりました」。少しほっとしました。医者でなくても意識がしっかりしていて大丈夫とわかります。運ぶ病院が一番近い足柄上病院に決まっています。

担架で運ぶ事になりました。「狭くて出せない」「ぐるっと向こうの廊下を回るか」と相談の結果、頭の方を立てて斜めにして出す事になりました。もたもたしているの

で時間がどんどん過ぎて行きます。「頭あげろ!」。レスキューの一人が声をかけた時、おじいちゃんが頭を上げ、また左手を振り回して声にならない声を発しました。担架の上で暴れたら運んでいる人は迷惑です。「何か言いたいようですね。でも、わからないですね」とレスキューの人が私に向かって言いました。その場は、なんとなくのんびりした雰囲気です。「もっと早く。病院へ早く。おじいちゃんが死んじゃうよ!」

包んでいた毛布のまま、担架で救急車に収容されると、おじいちゃんは、また左手を振り回し、「アアアア、ウオオオ」と言い、今までより激しく暴れ出しました。「もう大丈夫だからね」。どうやら、おじいちゃんは、「救急車で病院に運ばなくていい。家で寝ていればいい」と言いたいようです。昔から病院がきれいなのです。「安静にしてください。車の中なので危険です」と、レスキューの人に注意されました。

「足柄上病院、了解!」。救急車は、はでにピーポーを鳴らして発車しました。ところが、家の前の坂を上ると、ガクンと急停止しました。発車したとたんにと停車です。

「どうしたのですか?」「了解、受け入れ病院を捜します」。足柄上病院は、いったん受け入れを了解したのに、「受け入れられない」と言って来ました。「医者がだめと言っている」「誰だい先生は? そうか、弱ったな。捜すか」。レスキューの隊長が携帯電話で小田原市内の病院や秦野の日赤病院などに連絡をしています。「遠くてもいいですか?」「はい、どこでも、お願いします。おじいちゃんは、大井町の病院にかかっていました」「その病院は、救急指定病院ではないので、救急車で運ぶ事はできません」

「おばさん(おばあちゃんの妹)を、山北の病院に救急車で運んだ事があります」「そこも、指定病院ではありませんが、患者さんがあらかじめ申し込んであれば、救急車で運ぶ事ができます」。 (そういえば、おばさんの時は、夫が山北の病院に連絡をしました。私が、機転を利かせて夫の友人の医師のいるその病院に連絡するように言ったた

めです。だから、すぐ救急車が運んだのでした)。「それでは、私が山北の病院にかけ
あってみます。でも、家に行かないと病院の番号がわかりません。携帯電話もありませんし、降ろしてもらえますか?」「番号は、ここに一覧表があります。何という病院
ですか?この携帯電話を使ってください。病院の電話番号は、なかなかみつかりませ
ん。時間がどんどん過ぎていきます。

「もしもし、山北の病院ですか?以前に、おばさんが脳梗塞でお世話になった事があり
ます。今度は、おじいちゃんが脳梗塞です。九十歳です。お願いできないでしょ
うか?」「先生にうかがってみます。少々お待ち下さい。病室がいっぱいですので受け入
れられません」「でも、なんとかならないですか。もう一度、先生に聞いてみていただ
けないでしょうか?助けてください」「先生にお聞きしましたが、病室がいっぱいとい
うことですので」「そうですか。わかりました。だめだそうです。救急車の中は、シ
ーンとしてしまいました。どこにも急患を受け入れてくれる病院がありません。

朝の太陽が高くなってきました。家の前の坂の上、踏み切りの前で、止まったまま
の救急車の中にいます。おじいちゃんは、運の悪い人だなあと思いました。でも、生
きているのですから、あきらめたらいけないと思い直しました。「おじいちゃん、しっ
かりして!足柄上病院の廊下でもいいです。上病院に運んでください。お願いします!
もう、六時になってしまいました。救急車に収容されてから一時間以上経過していま
す。このままではダメです。死んでしまいます。なんとかしてください。助けてくだ
さい!お願いします!お願いします!ウチの車で足柄上病院に運びますから、家にもどっ
てもらえますか?私が、この命、助けますから」。私の声だけが、救急車の中に大きく
響きます。レスキューの隊長が上病院に連絡しました。すると、今度はすぐにOKが
出ました。救急車がまた、けたたましくピーポーを鳴らして発進しました。足柄上病

院は、家から五分、目と鼻の先です。私が、「廊下でもいいです」と言ったのは、東名高速で大きな事故があって、上病院はベッドがいっぱいで、廊下にも寝かされている人々を見た事があったからです。

足柄上病院に到着すると、救急車から担架のまま、救急治療室に入りました。私は廊下で待たされました。二十分ほどすると呼ばれました。おじいちゃんは、病院のパジャマに着替えて処置室のベットに横になっていました。先生から説明を受け、入院診療計画書を受け取りました。病名は脳梗塞。病状は右片マヒ、失語。推定される入院期間は約一ヶ月。入院の説明を受けて帰宅しました。ひとまず安心です。

私が帰宅すると、まだ朝七時だったので、夫は出勤しました。いつもと同じ時間に出勤したので、だれも家の事に気付きませんでした。

その間、おばあちゃんはどうしていたのでしょうか。「おじいちゃんの叫び声が、聞こえなかったの?」「そうね、大きい声がしてたわね」「なぜ、すぐ私たちに知らせなかったの?」「なんだろうと思った。大きい声を出していたわね」「聞こえていたなら、私たちに言わなければだめでしょう」「そうね、そうだったわね。忘れていた。近所の人たちには、『検査をしたら、すぐ帰って来るそうです』と言っておいた」「えっ? そんな事を言っちゃったの?何も知らないで、そんな無責任なウソを、よく言えたね」「なんともない。おばあちゃんは、近所のひとの疑問にうまく答えたと思ひ込み得意そうです。困ったものです。

それにしても、救急車はなぜすぐ足柄上病院に運ばなかったのでしょうか。病室が空いていなかったのでしょうか。医者がいなかったのでしょうか。入院してみると、ベッドは空いていて若い医者も看護婦も大勢いました。救急車が到着すると、すぐ診察しました。この医者が担当医となりました。医者は夜勤で他の急患を診ていて手が

放せなかったのでしょうか。それとも、大きな手術をしていたのでしょうか。なぜ足柄上病院が受け入れを拒否したのか説明してほしいと思います。説明がなければ、誤解をし続けます。

夫が次のように言ってくれました。「病院にも医者にも何か都合があったのでしょうか。その理由は、聞いてみなければわからない。ただ、おじいちゃんを見れば、死ぬほど弱っていないと誰でもわかったから、レスキュー隊の人もあせっていなかった。僕もそれで安心だった。近い所に運んでもらったのだから、不幸中の幸いでしょう。」

(註)脳梗塞発症から三時間以内に壊死しかかった細胞を溶かすT P Aという薬を点滴で投与すると、ほぼ普通の状態まで回復し、十日もすると退院できる。ただし、T P Aが準備されている病院、判定できる医師、投与可能な患者は限られている。

日焼け

おばあちゃんの顔が、変形するほど真赤にただれています。顔中が薄く焼け焦げているようです。同じような顔を、原爆の写真で見たことがあります。通りすがりの人に「まあ、その顔、どうされたの?」とか「顔が真赤ですね。ひどいじゃないの」「病院に行かれたら?痛々しいわね」と言われるたびに、おばあちゃんは、「なんともないですよ。痛くも痒くもない。だんだんよくなっているんです」と、答えていました。話しかけた人は、心配顔なのに。

私も聞きます。「顔をどうしたの?病院に行ったの?」「足柄上病院の皮膚科に行っている。もらったこの薬を塗っている」「病名は、なんなの?」「知らないね。今度行ったら聞いてみる」「これって、三年前ぐらいから、もうずっとでしょ」「そう。時々よくなるけど、だめだな。なかなか治らない」。病院でもらった飲み薬が袋にいっぱい

と、チューブやビンに入った塗り薬が五個も六個もあります。病院には月に二回、おじいちゃんが付き添って行き、診察時は、おばあちゃんが一人で先生に診てもらいます。

「これは、ただの日焼けだよ。こんな油物を顔中に塗って、一日中外を散歩したり、庭のイスに腰掛けて日なたぼっこをしているのでは、紫外線に当たり過ぎて、皮膚癌になるよ。今から病院に行こう」「ついて行ってくれるの?」「私が、先生に聞いてみるよ。」

足柄上病院へは、歩いて行きました。近所の犬に手を噛まれた時、新松田駅の近くの外科に通院するのに毎日タクシーを使っていたら、何回か後には電話をしても乗車拒否されるようになったためです。おばあちゃんは、自転車の後ろにつかまって歩きます。「どこかで休もうか?」でも、休むベンチがありません。一度も休まず病院まで行きました。おばあちゃんは平然と歩きました。九十歳(現・2005年)、まだまだ元気に歩けます。

診察が始まりました。おばあちゃんの番になりました。「なかなか治らないのですが、どうでしょうか」。皮膚科の先生がカルテを見て、「まあ、山川先生(仮名)は、塗り薬をこんなにたくさん毎回出している。なんだろうね。この塗り薬を塗っていますか?」

「はい」「これは、ほんの薄くぬればいいんです。刺激が弱くて、赤ちゃんにも使うものですから、使い続けても大丈夫なはずですがね。赤くなっているのは、皮膚が薄くなって血管が見えているんです。ほら、ここなんかそうです。続けて様子を見てください。薬はまだあるようなら、それを付けてください」「わかりました」「お大事に。」

「皮膚科の名医でも、わかっていないな」と思いました。これは、明らかに日焼けです。九十歳の老人が顔に薬の油を塗りたくり、帽子やサングラスをせず、元気に一日

中、紫外線を浴びて外を歩き回っているとは思われないだろう。

支払いを済ませてから、おじいちゃんの病室に立ち寄りました。私が売店で買物をしてもどると、「先生が回って来て、おじいちゃんとじゃんけんをしたの。おじいちゃんは、右手ではできなかつた。おもしろかつたね」と、おばあちゃんが言いました。おじいちゃんも笑っていました。なんて、のん気な人たちなんだと思いました。おじいちゃんは、右手が動かないことが素人でもわかるのです。右手は、握り締めたままの状態です。つまり、「グウ」「チョキ」「ペア」の「グウ」しか出せません。

おじいちゃんは、一人でパジャマの着がえができないので手間がかかりました。右手が利かないので右手から袖を通して着せるのです。よだれが、新しく着がえたパジャマに垂れます。「誰か来て、お願い、一緒に手伝って!」。心の中で叫びました。その間、おばあちゃんは、その階の病室を次々のぞいて見て回っていました。少しもじっとしていません。風邪でもうつったら大変です。普通は、妻が夫の着がえを手伝ってやるものですが、おばあちゃんは、若い頃からそんなことをした事はありません。そのような考えは全くありませんでした。

帰りに松田の町並みを見せてやろうと思い、病院の上の道を遠回りして駅まで歩きました。「松田山のすぐ側を東名が走っているね。食品店も駄菓子屋も、もう店じまい。本屋は花屋になったよ。肉屋はコロッケがおいしいね。写真屋も店じまい。トンネルの絵は、じょうずに描けているね。でも、黒いスプレーで落書きされた。『犯人を逮捕してください。落書きを消してください』と警察に行って、お巡りさんに言ったけど、全然だめで、そのままだよ。観光客が見たら、松田町は恥ずかしいよ。私は松田町が大好きだよ」。おばあちゃんは若い頃、松田町の小学校の先生をしていた事がありました。どんなにか、懐かしがるだろうと思ったのですが、「そうね。そうかしら」とか、

「ふーん」としか反応がありませんでした。おばあちゃんは、昔から喜んだり悲しんだりする事が無い人です。おばあちゃんの母親もそうでした。駅からタクシーに乗って帰宅しました。

さて、家に帰ると病院の薬を全部捨てました。「いやだよ、薬を捨てるのは。まだ使えるよ。せっかくもらったのに、もったいない」と、おばあちゃんが言いました。次に、朝一番に顔をヨモギの石鹸で洗う事を教えました。これまで、おばあちゃんは、朝起きて顔を洗う習慣がありませんでした。それから、外に出る時は、帽子を被る事を約束させました。帽子は五つも六つも持っています。散歩はいいが、日なたぼっこは中止です。庭の小さなイスを片付けました。

すると、どうでしょう。顔は、すぐ元の肌色にもどり、きれいになりました。病院にお見舞いに行ったおばあちゃんを見て、おじいちゃんが、まわらない口で、「よ・く・なっ・た。よ・かっ・た」と喜びました。おじいちゃんは、おばあちゃんの顔を、とても心配していました。おばあちゃんも、私が渡した鏡を見ては、「そうね、よくなったわね。よかった」とニコニコしました。やれやれです。

医療事故

平成二十三年(2011年)五月三十一日の神奈川新聞を何度も読み返した。そこには、思いがけない事が書いてあった。「県立九病院で2010年度中に発生した医療事故は八百三十四件で、医療事故が最も多かったのは足柄上病院(松田町)の三百件(前年度比十九件増)。循環器呼吸器病センター(横浜市金沢区)は百件だったが、前年度比でみると最も多い二十七件増だった。これは多すぎる。足柄上病院の三百件、いったい病院の中で何が起きているのだろう。安心して病院に行けないし入院できない。足柄上病院

では、かつてあった産婦人科も耳鼻咽喉科も診療をしていない。

私は、この産婦人科で長女を帝王切開で出産したし、娘の中耳炎が悪化して難聴になったとき、治してもらったことがあった。ほぼ毎日のように耳鼻咽喉科に通院した。耳鼻咽喉科の先生は、東海大学病院から来ていると聞いたことがある。おばあちゃんは、八十代の時、胆石が膵臓の出口で止まってしまい黄疸が出て危篤状態になったが、上病院で一命をとりとめた。点滴を自分で外してしまうので、責任が持てないという理由で予定された手術は行われなかった。胆石が、その後どうなったか説明されないまま退院した。

ドナーカード

ドナーカードの制度が始まった。「私の大学の保健室に沢山あるからもらってきてあげるよ」と長女が言った。そして、家族全員にドナーカードを配った。すると意外な展開になった。まず、おじいちゃんが、「こんなに年を取っているから使いものにならない。しわしわだ」と言った。おばあちゃんも、「そうね」と言い、署名しなかった。

夫は「肝炎を経験したから、血液に関係する事はだめで、どこも提供できません」と言った。次女は「自分の寿命を使い切ったらおしまいでもいい」と言い、長女も、「他人にはあげない。逆に自分が病気になって、臓器移植が必要になっても、しなくていい」と言った。娘たちの意見は、申し合わせたように同じだった。私は、その成り行きに驚いて声も出なかった。当然、全員署名すると思っていたからだ。特に娘たちは、必ず署名すると思い込んでいた。結局、私だけが全項目にマルをして署名し、だれにも見えるように冷蔵庫に貼り付けた。

臓器提供の意志は教育で変えることができそうです。提供してもらった人が、その

後の人生の素晴らしさを、もっと語ってほしいと思います。元気に暮らしている事を、みんなに知らせる義務があると思います。ドナーカードは自分の意思で書き込むものです。命の事ですから、厚生労働省、日本臓器移植ネットワークは国民へのアピールに力を入れてほしいものです。

(註)この文は、平成十年(1998年)二月の事です。その後、平成二十二年(2010年)七月十七日から「改正臓器移植法」が全面施行され、臓器提供意思表示カードも新しくなりました。

私の考えは、父母の介護を経て臓器提供反対の方向に大きく変化しました。それには自分が一番驚いています。

臓器移植

いつも何度でも 作詞 覚和歌子 作曲 木村弓

さようならのときの 静かな胸

ゼロになるからだが 耳をすませる

生きている不思議 死んでいく不思議

花も風も街も みんなおなじ

呼んでいる 胸のどこか奥で

いつも何度でも 夢を描こう

かなしみの数を 言い尽くす

同じくちびるで そっとうたおう

アニメーション映画『千と千尋の神隠し』の主題歌「いつも何度でも」の一節です。

平成二十二年(2010年)七月十七日より、「脳死は人の死」と決め、本人の同意がなくても、家族の意思で臓器を提供できる新しい制度に変わった。

「脳死」とは、脳幹の働きが無くなり、人工呼吸器などの助けが無ければ心臓が停止してしまう状態です。脳死になると、どんな治療をしても回復することはありません。元気になって歩いたり、社会復帰することは不可能です。しかし、傷害の場合によっては最後の瞬間まで家族みんなの声が聞こえている可能性もあります。臓器を取り出してしまえますか。

平成二十三年四月十二日、十代前半の男の子が脳死と判定され、心臓や肝臓、両肺、脾臓、両腎臓が五人の病気の男女(十代から六十代までの人)に移植された。提供者が十五歳未満の子供は初めてのことです。

平成二十二年七月に法律が変わる前、脳死になったら臓器をあげたいという気持ちを、カードや紙に書いておくことが必要でした。臓器提供は十五歳以上に限られ、大人の大きな心臓が合わない子供は、海外で移植するしかありませんでした。法律改正後は、年齢は関係なく、本人がそれまでに「いや」と言っていなければ、家族の決断で提供できるようになりました。今回の男の子の家族は、「世の役に立ちたいという彼の願いに沿う」と考えました。

臓器移植法が変わった今、家族で話し合う事は大切です。わが家の人々のように、思いがけない意見を持っているかもしれません。臓器をあげる意思も、あげない意思も等しく尊重されます。移植された人は、元気な様子を公表してほしいと思います。その後、どうされているのでしょうか。

無知

「チェーンストークス呼吸」の無知

意識がもうろうとしてきて話ができない。呼吸は無呼吸状態が数秒から数十秒続いた後、血中にたまった炭酸ガスを排出するため呼吸が始まり、次第に大きくなって過呼吸状態を繰り返す。呼吸中枢の機能が落ちた症状として死期が迫った時しばし起こる。

これを知って入れば、家族は心の準備ができるが、一般の人は知らない。医者や看護婦から「危ないので知らせる人があったら連絡をするように」と言われるが、「チェーンストークス呼吸」の詳しい説明はない。

「臨終の時刻」の無知

家族が見取った場合、実際の死亡時刻と医者が書いた死亡診断書の時刻が食い違い、怒る遺族がある。病院では、通常亡くなってから医者が来て死亡を確認するまで時間がかかる。医者が確認した時刻が死亡時刻となる。この事も一般の人はほとんど知らない。なぜなら人の死に遭遇することは、まれだからだ。医者は、遺族に「死亡時刻が違う」と詰め寄られても変えることは無い。遺産相続の順位などに、かかわってくるからです。

「家族性大腸ガン」の無知

家族性大腸ガン、初めて聞く言葉です。大腸ガンの中には、親から受け継ぐ遺伝子の異常で起こるものがある。患者の大半は二十歳代など若い時期に発症する。

家族性大腸ガンは、祖先の死因をたどれば、おのずとガンの発症を予告できることになるが、それはなかなか難しい。高齢者の死因の最も多いのは「老衰」です。よく「大往生だった」などと聞く。「老衰」といっても、死には必ず原因(病名)があるはず

だが、昔は高齢者の死因は「老衰」と、ひとくくりにされてしまい、詳しく記録されている事はあまりないようだからです。

ところで、ガンは医者^が未熟だと盲腸と間違っ^て診断することがある。これを一般に「やぶ医者」と言う。痛がるのは盲腸のあたりでも、もっと深い部位にガンがある場合がある。たとえば胆管^{たんかん}ガン。これはわかりにくい。高齢者の場合、盲腸の手術を受けた事があることを、家族が認識していないと大変なことになる。

白内障

頼まれた『豚の目玉』三十個を隣町の肉屋に買いに行きました。毎年買いに行くのは私の役目です。「注文した『豚の目玉』を受け取りに来ました」と言うと、店内にいた客も店員も、私の方を注目しました。みんなが嫌な顔で、不思議がっているのが手に取るようにわかります。「黒いビニール袋を二重にして入れて置きました。毎度、ありがとうございます」。豚の目玉三十個、一個六十円なり。『豚の目玉』は、夫が高校の生物の授業で目の解剖の実験に使います。

娘たちも、夫の指導で豚の目の解剖をしました。最後に、新聞の上に水晶体を置くと、字が大きく見えました。娘たちは、「すごい!!」と感動の声を上げて喜びました。勤務先の高校の生徒の間からも感動の聲が上がることでしょう。

おばあちゃんは、娘たちが大学生の時、白内障の手術をしました。手術は女の先生で、手術の前に入念な検査と、ミーティングがありました。手術はほんの七分程度で終わり、そのビデオをもらって、すぐ帰宅しました。おばあちゃんは、私には「手術は、痛かったよ」と言ったのに、他人から「手術をされたそうですね。いかがですか？」と聞かれるたびに、「なんでもない。よく見えますよ」と言って笑っていました。九十

歳になった今(平成十七年)でも、よく見えるので大成功です。この日本のきれいな四季おりおりの景色が見えることは、すばらしいことです。

わが家は白内障の家系のようなので、私が大学生の時、祖母(たつ)も白内障の手術をしました。昔の事なので、一週間も入院し、目を包帯で覆い絶対安静でした。包帯を取ると、「光がまぶしい」と言いました。そして、「よく見えるの?」と聞くと、「手術をしても、たいしてかわらない」と、みんなをガッカリさせました。

祖母は退院しても、かつてのように雑巾を縫うことはなくなり、この頃を境に、急激に痴呆になっていきました。農家から嫁に来た人なので、足腰は、最後の頃まで達者でしたが、孫の私に、「親切な、お小僧さん、どうもありがとうございます」などと言い、しだいに誰が誰か区別がつかなくなりました。いくら痴呆が進んでも、夜中に徘徊したり排泄物を食べたりということはありませんでした。

おばあちゃんが食事の面倒や、排泄物の世話をし、おじいちゃんは車を運転して医者に連れて行ったり、風呂に抱きかかえて入れたり、布団を干したり掃除や洗濯をして、まめまめしく世話をしました。

この経過からすると、確実に私も孫が大学生の時、白内障の手術をしなければならなくなるでしょう。そのことはいつも頭をよぎり、眠れないことがあります。不安です。娘たちに話すと「その頃には、もっと医学が進歩している」「八十過ぎまで生きていられるかの方が問題だよ」と言います。夫も、「これから先のことを、くよくよ考えなくても、なにもならない。だいいち白内障になるとはかぎらないのだから。なったらなつたで、その時は、その時さ。その頃には、僕は肝臓癌で死んでいないしね。せいぜい、娘たちとの関係を良くしておくことだね」と笑いました。のん気な家族です。

サングラス

私は、外に出る時サングラスをかけている。白内障の予防です。皮膚は、紫外線にさらされ続けると皮膚ガンになることは知られるようになった。眼も日焼けすることが最近わかってきて、サングラスをする人がふえている。登山家の田部井淳子さん(女性として世界で初めてエベレストに登頂。平成二十三年現在・七十一歳)も、サングラスを推進している。

ある日、私がサングラスをして畑仕事をしていると、「どうされたのですか。サングラスして」と聞く人があるので、「白内障の予防です」と答えると、その人は、「お大事になさってくださいね。大変ですね」と挨拶した。なんか変だなと思ったが、それで終わった。

それから十年後、道でその人に出会った。すると、「もう眼は回復されたのですか。見え方はどうですか」と聞かれた。不思議に思って「なんの事ですか?」と訊ねると、「緑内障なんでしょう。大変ですね」という返事が帰って来た。「だれが緑内障なのですか?」、私は驚いた。白内障予防のサングラスをした私が、緑内障と思われていたとは。「私の母が緑内障で、サングラスをかけていたことがあったものですから、緑内障と思い込み、失礼しました」と、その人は言った。今度は逆に、私が心配した。緑内障の家系なら緑内障になる可能性がある。「眼を大切に」と言いたかった。母親の病院に付き添って行けば、医者から緑内障の説明を聞くことがあつたらう。母親の介護はだれがしていたのだらう。介護は大変だが、介護をした人に、その後の生き方を教えてくれるものです。この日、私はサングラスをしていなかった。曇りで、今にも雨が降りそうな夕暮れ時だったからです。

(註)日焼けと紫外線。日焼けとは、太陽の光などに含まれる電磁波の紫外線が原因で

起きる、皮膚の炎症。海水浴などの後、紫外線によってやけどが起き数時間で赤くなる「サンバーン」と、皮膚にあるメラニンという色素によって数日後に皮膚が黒くなる「サンタン」の二種類がある。メラニンは紫外線を吸収する働きがあり、紫外線を浴びると皮膚を守るために増える。

日焼けは皮膚を老化させ、しみや、しわの原因になるだけでなく、長い間には、遺伝に関係する細胞のDNAを傷つけて皮膚ガンを起こしたり、白内障など目の病気の原因になったりする。紫外線は、体内にビタミンDをつくる、いい面もあるが、これは普段の生活で浴びる量で十分だといわれている。紫外線の浴びすぎは、帽子・サングラス・日焼け止めスプレーなどが効果的です。

輸血

平成二十二年(2010年)十二月一日の読売新聞投書欄に、「献血を続けて三十数年で百八十五回。先日、七十歳の誕生日を前に最後の献血をしてきた」という記事が掲載されていた。東京都八王子市の女性です。

私は、ありがたいことだと思いました。自分の家族が輸血をすることになれば、「献血」や「輸血」の事など真剣に考えないものです。おじいちゃんは輸血を二回しました。輸血を一回受けると一割負担で五万五千元です。日本の介護保険制度は、すばらしく、後期高齢者保健の一割負担は、とても助かりました。

この法律が国会を通過した時、「俺たちを後期高齢者などと呼んでけしからん!」
「一割も負担させて俺たちを殺す気か!」と多くの老人、特に男性が不満を言った。しかし、現実には高齢者にとって優れた制度です。おじいちゃんの場合、十一月は一回の輸血と十五日間の入院治療代として七万円出しておつりをもらった。おじいちゃん

の入院費を支払う私の隣の窓口で、八十歳ぐらいの人が、「今日の診察料は、百四十円です」と言われていた。

体験談

小田原市曽我にある障害者施設から童謡ボランティアの依頼がありました。プログラムには北原白秋作詞、中山晋平作曲の『砂山』もありました。いよいよ『砂山』になりました。すると前奏から全員が手拍子を始めました。そして歌の合間には「ソレ」「ヨイショ」「ドッコイ」などの掛声(合いの手)が飛び交いました。中には舟をこぐしぐさをしている人もいます。私は、その光景に驚きました。そして感動しました。

今まで、『砂山』は、譜面通りに歌い、童謡の会では、まっすぐに声を出すストレートな歌い方を指導していました。一般的にも、ステージなどでは音楽大学を卒業した人たちが、白いドレスで美しい声を響かせて歌っています。しかし、作曲をした中山晋平は、当時、野口雨情らと新民謡の普及に力を入れていた時期でした。ピアノ伴奏譜を見ると、左手オクターブを使って力強い太鼓を表現しようとしています。これは民謡のように歌う曲なのです。

「そうか、この『砂山』は、このように歌うのか」と思いました。障害を持つ人たちに教えられたことは感激でした。童謡の会終了後、私は、その感激を指導員の方々にお礼の言葉として伝えました。

それ以来、私の主宰する童謡の会では、『砂山』を歌う時、手拍子を打ちながらハズミを付けて民謡調で歌っています。みなさんも、お試してください。

散歩

公園で、白と黒のプードルを散歩させているおばあさんに出会いました。「かわいい

ですね」と声をかけると、次から次に話し始めました。

「この犬は、両方ともオスで、もう十三年も飼っているの。毛を刈ると、もっとかわいい。おとなしい性格で、抱いても夏でも毛が抜けないから、家の中で飼っていても大丈夫なのよ。おじいさんが犬好きでペットショップで買ったのに、ほとんど触りもしない内に死んでしまった。おじいさんは、どんどんやせて、骨と皮になって、好きな酒も飲めなくなって、別の医者に診てもらったら癌だと診断された。それまでかかっていた医者は何とも無いと言っていたのに、別の医者から『あと二ヶ月の命』と言われて、八年前に亡くなったのよ」それは残念なことでしたね。今、おいくつですか？」

「七十三歳だよ」「なんだ、若いですね。私の父と母は九十歳(現・2005年)ですよ」「そんなら、私なんか、まだ子供だね。一人住まいをしていると、セールスがたくさん来るので、犬がいれば安心。でも、吠えないから駄目なんだけどね。」

一人暮らしの、このような老人の家にも、セールスが来るのかと驚きました。老人は簡単にだませるし、殺害事件も頻繁に起こっています。許せない事です。

「母は、若い頃から足を鍛えるために、散歩をしていました。近所の人からは『なにもしないで、のん気なもんだね』と言われていました。昔は、散歩をする人は珍しかったですからね。でも、今ではみんなが散歩をしているし、そう言った近所の人も、家から駅まで毎日散歩をしています」「私もそうだよ。『犬を二匹も飼って、いい身分だ』と言われてはいるけれど、足腰をきたえているから元気だよ。同じぐらいの年齢の人でも、もう歩けない人が多いね。こうして元気なのは、この犬との散歩のおかげさ。この老人も散歩をしていて元気です。

体を鍛えるのには、いろいろなスポーツがありますが、外気にあたり散歩をするのが、一番いいようです。長生きの秘訣は毎日の散歩にあり。お金がかかりません。昔

はどの家も農家で、農作業は重労働でした。だから散歩の必要がありませんでした。

犬に噛まれる

平成十七年(2005年)四月二十五日の五時頃、買物から帰ると玄関が血だらけでした。どうしたのだろう、鼻血で誰か倒れているのかな、鼻血にしては、多量に出血しすぎています。玄関から廊下そして台所に続いていました。台所に入ると、床が玄関以上に血が飛び散っていて、真っ赤です。流しには血の付いた雑巾が二枚、そして流し桶の水が血で真っ赤でした。

おじいちゃんとおばあちゃんは並んで座って、福知山線の列車脱線事故のテレビニュースを見ていました。おばあちゃんの左腕には、使い古しの雑巾が巻かれ、紐で結わえてありました。その雑巾から血が滴り落ちています。

「どうしたの」と言うと、「犬に噛み付かれたの。もう大丈夫」と、おばあちゃんが平然と言いました。どこの家の犬なのか聞いても答えません。だれかをかばっているようです。

そうしていてもしかたがないので、病院へ連れて行くことにしました。家の目の前の病院は運悪く休診なので、タクシーを呼んで松田町の駅前の外科に行く事にしました。以前、その病院に行った時、「猫の喧嘩の仲裁に入って噛まれた」と話している患者がいたのを覚えていたからです。

タクシーはすぐ来ましたが、運転手さんが「それはどうしたのですか。イヌは狂犬病の注射をしてあるのですか。いつ噛まれたのですか。これから行く病院には電話を入れましたか。足柄上病院の救急の方で見てもらいますか」など矢継ぎ早に聞いて来て、私たちを乗せるのを嫌がっているように見えました。この場合は、救急車を呼ぶ

べきだったと、あとで思いました。運転手は、座席に血がつくの嫌がっていたのだと知ったのは、最近の事です。

駅前の外科には、二人の客がいました。受付に「近所の犬に噛まれたのです。九十歳です。先に診ていただけませんか」と言いました。次の人が呼ばれましたが、次の人は、「どうぞ先に」と言ってくれ、もう一人の人も順番をゆずってくれました。私は血を見て頭がパニックになっていました。

「消毒はしたの?」と先生に聞かれました。「いいえ、してありません」と答えると、先生は、いやな顔になりました。右ほほと右腕には犬の歯形がくっきりと付いていました。看護婦さんが、左腕の雑巾を縛っている紐を鉗で切り、雑巾をはがすと、肉と皮がはがれてぶら下がった状態になっていて、骨が見えました。血が噴出してきました。

先生にも「犬は予防接種がしてありますか」と聞かれました。「わかりません」と答えました。看護婦さんに、「ひどいですね、痛かったですでしょう。大きい犬ですか」と聞かれた、おばあちゃんは「そうね、たいして大きい犬ではないです。茶色の雑種の柴犬です」と答えていました。

「出血が止まらなければ縫えないから、今日は消毒をして包帯を巻いておきます。明日、処置をします。化膿しないといいですね」と、先生が言われました。消毒薬を塗って、包帯でぐるぐる巻きにしてもらいました。看護婦さんに「痛いですか」と聞かれ、おばあちゃんは「少しね」と、すましていました。痛い感覚がわからなくなっているようです。これほどのケガで痛くないということはないでしょう。

「他に、噛みつかれたところはありませんか」「そうね、ありませんね。」「足は噛みつ

かれていないの」と、私が聞いたが、おばあちゃんはきっぱりと「ない」と答えました。足に噛みつかれなかったのが不思議でしかたがありませんでした。

先生から、「左腕は上に上げていてください。これで出血が止まるでしょう。しばらく、毎日通ってください」と言われました。

薬は、抗生物質・痛み止め・胃薬の三種類を一日三回食後に飲むように五日分もらいました。医者、看護婦、受付、順番を代わってくれた二人の患者に、「すみませんでした。御迷惑をおかけしました。ありがとうございました」と頭を下げて謝ってお礼を言いました。噛まれてから病院で診察を受けるまで、四時間以上が経過していました。

「帰りも乗せましょうか」と、親切に言っていたタクシーの運転手さんは、状況を把握すると、逃げるようにいなくなっていました。

帰りは、新松田駅のタクシー乗り場まで歩いて行き、タクシーで帰宅しました。おばあちゃんは、私が支えるために、ちょっと包帯のしてある部分に当たると、「痛い、痛い!!」と言いました。病院では「痛い」と言わなかったのに。

帰宅して玄関と台所の床を拭きました。私が雑巾を絞って、おじいちゃんも、左手で一生懸命拭きました。血痕は、もう固まってこびりついていたので、少しずつ擦って拭きました。二人で黙って拭き続けました。六時近かったので、玄関の土間は血だらけのままにして夕食にしました。おばあちゃんは、包帯を巻いた重傷の左腕を胸に当て、軽傷の右手に箸を持って食事をしました。

血だらけの洋服を着がえさせ、紙おむつを取りかえて、寝かせる事にしました。紙おむつは、おしっこで重くなっていました。股引を脱がせて見ると、右のももに四ヶ所も、犬の牙が鋭く深く突き刺さった跡がはっきりとありました。すぐにマーキュロ

を塗ってバンドエイドでとめました。^{ももひき}股引が血で染まっていました。全部を着がえさせて風呂場に持って行って洗おうとしたら、脱衣所の床、手すり、ドアも血だらけでした。脱衣籠を見ると、中に今日着ていたエプロンがあり、真っ赤に血に染まっていました。風呂場に行く廊下にも血こんが点々と続いていました。

翌日、八時半少し前にタクシーに乗って病院へ行きました。このような時、私が車の運転ができるといいのにと思いました。昨日縛ってもらった包帯に血がにじみ出ていました。先生に「噛んだ犬は、予防接種がしてありますか」と、再度聞かれました。「聞いていないのでわかりません」と答えると、「聞かなければ、だめじゃないか!」と叱られました。看護婦さんが「なぜ、その家に行ったの?」と聞くと、おばあちゃんは「私がお金を貸したので、返してもらうために行ったのですよ」と即座に答えました。それを聞いた先生も看護婦さんも、返す言葉を失い沈黙しました。明らかに驚いているようです。私が一番驚きました。あれほど何度も問いただしても答えなかった事を、他人にはすらすらと答えたのですから。

包帯を取った左腕を見て先生が、「寄せておきましょう。そちらに寝てください」と言われました。左腕は腫れ上がり、ガーゼをはがしたので出血し、血が床に落ちました。私は床に落ちた血を持っていたティッシュペーパーで拭きました。看護婦さんが「いいですよ」と慌てて言いました。腕は、肉が見えていて痛々しい。おばあちゃんを、看護婦さんと一緒に横にさせて側にいると、先生が「あっちに行っていて」と言われたので、私は診察室を出て廊下のイスに腰掛けて待ちました。

「痛い、痛い!!」「ちょっと我慢してください。あと一ヶ所、もう一ヶ所」縫っているのでしょうか、時折おばあちゃんの「痛い、痛い!!」という声が診察室に響きます。私は顔を手で覆って下を向きました。

おばあちゃんの処置が長引いているので待合室は、十人もの人であふれ、外に二人立ってタバコを吸っていました。受付の人と、男の人が話しているのが聞こえます。「まだか。今日はどうしたんだ。おせエな。俺は、前に胃の手術をした所が痛くて、ガスターテンを飲んでいるんだ。あれが一番きく。ちょっと診てもらおうと思って来たのに、なんかあったのか。」受付の人は、おばあちゃんが犬に噛まれ、処置している事を話していました。それを、みんなが聞いていました。おばあちゃんは二番に診察をしたのに、四十分もかかってしまいました。包帯でぐるぐる巻きになったおばあちゃんが診察室から出て来ると、みんなが注目しました。待合室は急にシーンとなりました。

新松田駅前の寿司屋で寿司を買ってタクシーで帰宅しました。タクシーの運転手は終始無言でした。行き先を告げても。嫌な者を乗せてしまったといった態度でした。「タバコ屋の角を左に入ってください」と言うと、「金子の病院の近くだろう。その病院なら、だれでも知っているよ」と言い返しました。後は、また無言で運転し続けました。家に到着し料金を支払い、「領収書をください」と言うと無言で手渡しました。タクシーのドアが開き、おばあちゃんが降りてからタクシーのドアの端をつかんで閉めようとしたのと、運転手がドアを自動で閉めたのが、ほぼ同時だったので背筋が寒くなりました。おばあちゃんが一瞬遅ければ、引きずられてドアに手はさまってしまいました。

随分不親切で態度が悪い。普通だったら一言注意をする所ですが、そのような元気が残っていません。タクシーは、こりごりだと思いました。老人特有の悪臭を嫌うのは当然とも思いました。悲しいとも思いました。疲れています。

夜、「水でぬらさないでください。化膿しないといいですね。予防接種はしてありま

すか」という先生の言葉が何度も頭を過ぎり、心配で眠れなくなりました。左腕を切断するようなこともあるでしょうか。夫が、「噛みついた犬は、ずっと家で飼っている犬でしょう。心配はいらないはずです。医者には『予防接種はしてあります』と云うしかないな。狂犬病は潜伏期間が長くて、一ヶ月近くになるから心配しているんだよ。タクシー会社には電話で抗議をするといい。言わなければ改善されない。きっと、その運転手は人と話すのがいやだから運転手になったのでしょう。普通の職場では通用しない」と言いました。夫の話を、「うん、うん」と聞いている内に、涙がこぼれました。

おばあちゃんは、左手を包帯で縛っているので、ラジオ体操も、夏みかんやジャガイモの皮むき、床の拭き掃除、食器洗い、さらにおじいちゃんの着替えの世話ばかりでなく、自分の着替えすらできなくなりました。そして大好きな散歩までなくなってしまいました。私は突然、二人の老人の全ての世話をすることになりました。おばあちゃんの着替えの間、おじいちゃんはテレビを見て、おとなしく待っていました。そして、「ゆっくりでいいぞ」と言いました。おじいちゃんの方が、頭は確かなようです。

三日目です。前日と同じ時間に行ったのに三人の患者が来ていたので、私たちは四番でした。おばあちゃんは、私たちが一番でなかったので残念そうです。一番の女の人、前回同様注射をしてもらっていました。七十歳と八十歳ぐらいの女性患者がおばあちゃんを見て話しているのが聞こえました。「あの人は、何をしたんだろうね」「転んだんだろう。九十歳だってよ。若々しいね」「しっかりしているね。娘だか孫だか知らねえけど、ああして付き添って来てもらえていいね」。私は苦笑しました。私たちを見て、うらやましがっている人がいるのです。

看護婦さんが包帯を取って見ると、血が止まっていました。腕は、白い網のようなものがしてあります。その上から消毒をして終わりでした。「左腕以外は、かすり傷のようなものです」と先生が言われました。治療費は百二十円でした。受付の若い女性が窓越しにおばあちゃんを見て、「ひどいね、痛々しいね」と言っているのが聞こえました。

「先生に『どうでしょうか』と聞かなくても、私が見てもわかるほど、治ってきているよ。一安心だよ」と夫が言いました。そして、「痴呆の来ている高齢者から金を借りているなんて、なんてヤツだ!」と吐き捨てるように言いました。

その後、タクシーで毎日病院に通院しました。五日目からは、抗生物質を二錠朝晩飲めばよくなり、無口な先生が明るい表情で、「大分よくなりましたね。随分ひどかったからね、肉がなくなっている所が、治りにくい」とも言われました。

病院の待合室で、おばあちゃんはニコニコして「犬にガシッと噛みつかれたんですよ。骨から肉と皮がはがれてぶら下がったの。そうね、それほど大きい犬ではない。その家に悪いから言わないのよ」などと話して、うれしそうでした。聞いた人に、「オタクは、どこが悪いの?」などと聞き返したりもしました。

一週間も毎日同じ時間にタクシーを呼ぶと、「今、出はらっていますから二十分ぐらい待っていただかないと。それでもよければ」などと言われるようになりました。明らかに年寄りを乗せたくないのです。駅前まで歩いて行くと、ロータリーにタクシーがたくさんとまっていました。以後、病院には歩いて行くことにしました。「歩くのは何ともない」と、おばあちゃんが言いました。

十五日目、先生が「明日^{ぼっし}抜糸します。おおむねよくなっています」と言われたよう

に、抜糸が始まりました。先生は、終始無言で鉗を動かしました。私は、三步下がって後ろにいて、見ないようにしました。おばあちゃんは、時々「痛い、痛い。先生、痛いです!」と言い、看護婦さんが「我慢してね」と言いました。抜糸の残骸が机の上に山となりました。

一ヶ月後、ようやく病院に行かなくてもよくなりました。しかし、食が細くなり体重は三十三キロ、痴呆も進行しているのがわかります。

毎日通った病院の先生は、その後、病気になり、病院は閉院になりました。私は、「おばあちゃんを助けていただき、ありがとうございました」と言いたい。感謝の言葉を、直接会って、もう一度言いたいと思っています。病院の再開が待たれます(近年、佐藤外科医院は佐藤内科医院になった)。

(註)JR 福知山線脱線事故 兵庫県尼崎市で 2005 年 4 月 25 日に発生した事故は 2015 年 4 月 25 日、発生から 10 年を迎えた。快速電車が制限速度を 45 キロ上回る 115 キロでカーブに進入して脱線。線路わきのマンションに激突し、乗客 106 人と運転士(当時 23 歳)が死亡、562 人が重軽傷を負った。

人命救助

久しぶりに酒匂川の土手を散歩しました。うしろから来た男の人に声をかけられました。

「十日ぶりに来て見たら、風景が変わっているのが驚いている」「向こう側の山の道もいいですよ。アップダウンがあっておもしろいです」「僕はあそこを走っています」「それはすごいですね。補聴器をなさっているんですか。それって良く聞こえますか」「あなたの声は良くとおるのでわかりますが、男の人の声は低いから聞き取りにくい。海

に潜ってサザエを取る仕事をしたりしていたし、機械工場での大きな音も原因かな。僕は、輪になってやるダンスをしています。1で前に出なければいけないのに、どうしても2で出るので、なかなか合いません。公民館で練習しています。ダンスは奥が深い。おもしろいですよ。車椅子ダンスもしたことがあります。ウチの奥さんは散歩をしません。家にいるばかりです。子供は三人で、もう子供じゃあなくて大人になってしまいました。男ばかり三人です。僕は、日本中の山や、東南アジアにも行きます。いろいろ見ると、視野がひろがります。外国へ行くのは、箱根で酒を飲むより安上がりですよ。みんなと一緒にいこうと誘っても、なかなか行こうとしない。私は、「すごいですね」と言いながら一緒に歩きました。

その男の人は、私に「もっと早足で歩かなければだめです」とか「こんなに重たいリュックを背負っていたらだめです」などとアドバイスをしてくれました。そして、驚くことを話し出しました。「僕は、人命救助で表彰状と金杯をもらった事があります。それは、十二月三十一日の夜で、近所の家が火事だというので行って見ると、二階に十歳ぐらいの女の子がいる。樋にぶら下がっている雨水を送る鉄の鎖を引いてみたら大丈夫だったのでそれに捕まってよじ登って女の子の所まで行ったけれど、みんな消火でワーワーしていて、気がついていなくて、女の子を降ろせない。二階だから五メートルぐらいはあるでしょう。そこへ弟が来て、『大丈夫だから投げろ!』と言うので投げて助けたんです。あの時どうしてあんな力が出たか不思議です。火事場の馬鹿力というやつですかね。父親の火の不始末だったみたいです」「それは、すごいですね。女の子は、本当に喜んでいるでしょう。よかったですね。金杯をもらったというのもすごいですね」「女の子は、もう三十歳ぐらいになるでしょう。」

さらに、驚く話を聞きました。「僕は墓地を買ったんです。丸い形の自分が入るお墓

を作りました。平和な太陽を象徴して建てたんです。太陽は、世界中の人を平等に照らすでしょう。あそこは無宗教でも買えるんですよ。だからいいです。僕の実家は九州です。九十二歳の母がいます。ずっと元気でしたが、脳梗塞をやってから急に弱ってしまいました。たまに飛行機で帰ります。遠いです。幸い妹がよく面倒をみてくれています。僕が帰っても、何をしたらいいのかわからない。男はだめですね。長男の嫁は、『長男に嫁いだのであって、親に嫁いだのではない』なんて言っててねえ、全然だめですね」「それってよくわかります。介護では、お嫁さんでは嫌だろうなあという場面が沢山ありますからねえ。私が、見ず知らずのお嫁さんの肩を持ったので、男の人はいやな顔をしました。「夏の間はペンキ屋をしている。今日は、これから六時に人と待ち合わせです」と言いました。駐車場の軽トラックには、仕事の道具が積みまわっていました。

生きる

「あなたは、一人っ子だからいいわね。兄弟がいると、誰が親の面倒をみるかでもめるのよ。大勢いればいたで、それなりに大変なのよ。これは、何人もの人から聞いた言葉です。私は、大勢兄弟がいれば、仕事を分担し助け合い、より良い介護ができると思っていたので驚きです。昔は、長男・長女が全財産をもらい、そのかわりに親の面倒をみました。とても簡単でわかりやすかった。ところが、最近の法律では、財産は兄弟で平等に分ける。親の面倒は誰がみてもいい、となったので誰が親の面倒をみるかで押し付け合い、その駆け引きがあるようです。もちろん、昔でも長女夫婦だけが十年近く認知症の母親の介護をしても、次女がちゃっかり土地を譲り受け家を建てているケースもありますが、これはよほどの例外といえます。介護される立場の親が、

どのように姉妹を育てたかが問われます。

三十年前、一人っ子が嫁に行き、姓が変わると人々は「お宅はもうおしまいね」と言いました。一つの家を、二つの表札を笑いました。そのような家は、どこにもなかったからです。珍しかったので注目の的になりました。新婚のスタートにあたり、世間から突きつけられた壁は、あまりにも高く、楽しいはずの新婚生活は引きこもる暗く軟弱な生活となりました。

しかし、時代が進み三十年後の今日はというと、「娘夫婦と暮らせる親は幸せねえ」「気がねをしなくて一番いいわねえ」「娘に面倒をみてもらうのが理想的で最高ね」。みんなが口々にわが家を、うらやましがります。世間の口は、なんとも勝手なものです。私は、今度は引きこもったり流されたりしない。前を向いて元気に生きる。

「平成十七年(2005年)元旦。私の名前は池田小百合です。どうぞよろしく。」

被災

平成二十三年(2011年)三月十一日午後二時四十六分頃、三陸沖でマグニチュード9の巨大地震が起き、大津波が襲い、東日本大震災が発生した。一夜明け、安全とされていた東京電力福島第一原発の危機的状況が明らかになった。

当初発表された「レベル5」は、後日「レベル7」に引き上げられた。原発推進派の人々は、チェルノブイリの「レベル7」とは違うと、盛んに弁解し、人体への影響が無い事を強調した。

死者は一万二千人以上、死者のほとんどが水死で、六十歳以上の高齢者でした。行方不明者は一万四千人以上で、十五万三千人以上の人々が避難所暮らしとなった。

一般の人が右往左往する中、医者・看護婦・薬剤師といった意識の高い人は、落ち

着いていました。見習いたいものです。

ラーメンをすする少年にテレビのアナウンサーがインタビューをした。「どうですか」。少年は「みじめで、悔しい」と言った。アナウンサーは、次の人にインタビューをした。少年が、「おいしい」とでも言うと思ったのだろうか。質問は答えるより難しい。気楽な質問は相手を傷つける場合がある。

避難生活をしている子供たちを喜ばせようと企画された誕生会では、小学生の女の子が「今まで、こんなに大きなケーキを食べた事がなかった。だから嬉しい」と、はしゃいでいた。テレビを見ていた夫と私は顔を見合わせ複雑な気分だった。

夫が案じていた通り、福島から東京に避難して来た子供は、「放射能を浴びているから近づくな。うつる」と、いじめを受ける事となり、官房長官や文部科学大臣から感染などないので配慮するよう異例のテレビ放送があった。

「親が家庭内で、そう言っているからだ」と夫が怒った。私が、「ありえないことだよ」と言うと、「それは甘い。子供は残酷な面があるんだ。目の前の人に平気で臭い、汚いと言う。すべて家庭内やおとな社会の反映です」と言った。

家庭の教育、学校の教育は大切です。大人が正しい知識を持つことが、子供の教育につながる。

平成二十三年(2011年)七月一日、秦野赤十字病院(秦野市立野台一丁目一番地)にガンの定期検診のため行くと、ロビーに震災直後の被災地に医師、看護婦、薬剤師らが行った報告と写真が展示してあった。医療チームの皆さんに「ごくろうさま」と言いたかった。そして、私の家族は秦野赤十字病院が気に入って、いつも利用しているので、自分の事のように誇らしかった。このパネルを多くの人に見てほしいと思った。

天の川

海野厚

白い鳥 白い鳥

白い鳥 二つ

天の川 わたれ

わたった わたった

仲よく わたった

この詩は、雑誌『赤い鳥』大正七年(1918年)十二月号に掲載され、選者の北原白秋が激賞したものです。俳句を作っていた厚が、まだ元気な時に詩にも挑戦した初期の作で、作品群の原点に位置する。その後、『おもちゃのマーチ』『背くらべ』などを残し亡くなりました。享年二十八歳十ヶ月の短い生涯でした。肺結核だったため、残された原稿は焼かれました。大好きな厚の詩を、地震で亡くなった人々に捧げます。

病院でも歌う

命が優先される深刻な医療現場では、歌を歌う事は忘れられてしまいがちです。ところが、平成二十三年(2011年)九月二十九日、NHKテレビ『新感覚医療エンタメ、総合診療医ドクターG』に出演した名古屋大学医学部附属病院の医師・鈴木富雄先生は、患者と一緒に病室で歌を歌っていた。看護婦さんも、他のスタッフも歌っていた。高齢男性のリクエストは童謡『証城寺の狸囃子』だった。「ぼんぼこぼんのぼん」と患者も口ずさみ、最後に全員で拍手した。患者は「ありがとうございました」と言って笑顔を見せた。清々しい顔だった。

病院で医師がリードして歌うのは珍しい。歌が好きで、医療に余裕と自信がないとできないことです。歌はいいとわかっているけど、なかなか実践する先生はいません。看護婦さんたちから苦情が無いのは、医師への信頼が深い事がうかがえます。

この日のゲストの一人は、元アイドル歌手ピンクレディーの増田恵子(K)さんなので、司会者が「ピンクレディーの歌は、どうですか、歌いますか」と質問した。すると、「リクエストがあれば挑戦します」と余裕があった。患者の事を一番に考え、患者に寄り添った医療の話は、出演した若い医師や全国の視聴者の誰をも感動させた。今後、自分が世話になるであろう医療現場に期待をしたい。